

## 戦時中の体験を聞く会

共催：東松山市

平成27年8月2日（日）

語り手 <sup>とうま</sup>藤間 <sup>とよこ</sup>豊子 さん 「熊谷空襲体験～昭和20年8月14日夜のこと～」

【プロフィール】 大正13年埼玉県生まれ。熊谷空襲当時、21歳。妊娠5カ月での空襲体験。

現在、熊谷商工会議所女性会顧問。熊谷市在住。

【お話の内容】 8月14日の夜、警戒警報が鳴ったかと思った途端に、熊谷駅の上空あたりに照明弾が落とされ、市内が昼間のように明るくなった。その直後に、焼夷弾が降ってきたため、夫・母・妹の4人で自宅の頑丈な防空壕に避難した。しかし、火の手が強くこのままでは危ないということで、荒川の土手に逃げることにした。あまりに急な出来事だったので、靴も防空頭巾も見当たらず、裸足で座布団を頭巾代わりにして逃げた。途中、焼夷弾



は2m間隔で突き刺さり、まるで大きな線香花火のようだった。妊娠5カ月であったが、すっかり忘れるほどだった。夫が自宅に軍刀を忘れたので取りに帰ったが、その時父が防空壕で息絶えていた。見ると、焼夷弾が肩のあたりから胸に突き抜けていた。

街中の密集したところの防空壕は危険。蒸し焼きにされてしまう。川も危険。一酸化炭素中毒で星川では多くの人亡くなった。また、薬品を常備しておくことも大切だと感じた。

「疾風に勁草（けいそう）を知る」という中国のことわざがあるように、人生には困難や逆境がつきもの。それに負けず、くじけず、我慢して、勁草のように強く生き抜いていくことが大事です。

平成27年8月15日（土）

語り手 <sup>はっとり</sup>服部 <sup>みちこ</sup>道子 さん 「広島原爆体験～あの日ピカドンが～」

【プロフィール】 昭和4年東京都生まれ。爆心地より3.5km、軍医部の看護婦として従事中に被爆。当時16歳。現在、埼玉県原爆被害者協議会（しらさぎ会）理事。蕨市在住。

【お話の内容】 広島的女学校を繰り上げ卒業後、すぐに陸軍の軍医部で見習い看護師となった。8月6日の当日、8時の朝礼が終わり、解散した直後、目の前が光った。一面、白とも水色とも赤ともいえない光が混ざって、私には七色に見えた。「ただ事でないぞ伏せろ」という上官の叫び声で地面に伏せた。心の中で「やられた」と思った。鼓膜が破れるほどの爆音。その後、気を失った。



意識がもどった後、負傷者の看護をするが、塗る薬もなく、軍医部にあったバターを塗ってあげるのが精いっぱい。患者を寝かせるのはむしろの上。一回りして戻ってくると息絶えている人が多くいた。注射を打つにも皮膚がやけどですむむけのため、打つことができない。そんな中、首のない赤ちゃんを抱えたお母さんがやってきた。「あっ、首がない」と思わず叫んでしまったとたん、そのお母さんは声にならない声で叫びその場で息絶えた。今でもその時の情景が目に残ります。

自分がその状況にいたらどうだろうと思ってほしい。そして、核兵器は絶対に廃絶しなければならない。